

よしつねせんぼんざくら

義経千本桜

〔解説〕 竹田出雲、三好松洛、並木千柳の合作。延享四年（一七四七）大坂竹本座初演。全五段の時代物。この作品は「仮名手本忠臣蔵」「菅原伝授手習鑑」と共に浄瑠璃の三大傑作とされています。義経伝説の堀川夜討ち、大物浦、吉野落ちの三事件を骨子とし、そこに壇ノ浦での平家滅亡に際して死んだとされた知盛（とももり）、維盛（これもり）、教経（のりつね）が、実は生きていて源氏に復讐しようとする筋がからまっています。

〔あらすじ〕

序 段 義経は平家追討の功により、後白河法皇から初音の鼓を賜りますが、実はこれには頼朝追討の院宣（いんぜん）が託されていました。頼朝は義経に使者を遣わし、知盛・維盛・教経の首が偽首であった事、初音の鼓の事を詰問します。義経は申し開きをしますが、正妻卿の君が平家一門の時忠の娘であるということに対しては返答に窮するのです。卿の君は自ら命を断って和睦をはかりますが、追っ手に押し寄せた土佐坊を弁慶が切った事により全ては水の泡となり、義経は都を落ちていったのでした。

二段目 義経は、あとを慕ってきた愛妾静御前（しずかごぜん）を折良く来合わせた家臣佐藤忠信に託して、九州へと落ち延びるため大物浦（だいものうら）渡海屋銀平宅で船出を待ちます。やがて船出した一行に銀平に扮していた平知盛が襲いかかります。綿密な計画に従った行動であったはずが、ふと気づくと事態はいつの間にか壇ノ浦の合戦の再現になっているのです。全てが徒勞に終わった事を悟った知盛は、守り通してきた安徳帝を義経に託し、碇を背負って海へと飛び込み、壮絶な最期を遂げます。

三段目 維盛の妻子、若葉の内侍(ないし)と若君六代君(ろくだいきみ)は、主馬小金吾(しゆめのこきん)この供で高野を目指しますが、途中でいがみの権太に金を騙し取られてしまいます。

〔小金吾討死の段〕内侍らに源氏の討手がかかり、小金吾は討ち死してしまいますが、そこへ通りかかった鮎屋の弥左衛門が何を思ったか小金吾の首を切つて持ち帰ります。

〔すしやの段〕弥左衛門はその昔、平重盛に恩を受けた身であつたため、維盛を奉公人の弥助として匿つていました。事情を知らない娘のお里は、弥助と夫婦になることを望んでいましたが、追われた内侍と若君が鮎屋に逃げ込むと、事情を理解し、三人を逃がします。母親に金の無心をしようと忍び込んでいた権太が褒美目当てに跡を追います。弥左衛門は討手の梶原に偽首の入つた鮎桶を出しますが、その中に会つたのは権太が母親から騙し取つた金でした。そこへ権太が首の入つた鮎桶を梶原に差し出して、褒美の羽織を受け取りますが、激怒した弥左衛門は権太を刺します。しかし、権太は苦しい息の下で、首は小金吾のもの、内侍と若君は自分の妻子であつたと父に告げるのでした。そこへ現れた維盛が梶原の置いていつた羽織を裂くと、中から袈裟衣が現れて、実は頼朝もかつて重盛に助けられた恩返しに、維盛を助けるつもりであつたことが判るのです。

四段目 吉野の河連法眼(かわつらほうげん)の館に匿われている義経のもとへ国元に帰つていた佐藤忠信が尋ねて来ますが、そこへ静御前の供をしたもう一人の佐藤忠信が現れます。不審に思つた義経が静御前に詮議させると、実は初音の鼓の皮に張られた狐の子が、親を慕つて忠信に姿を変えていたことが判ります。義経から鼓を与えられた子狐は、責めてくる教盛を狐の力で散々悩ませて義経の恩に報いるのでした。

五段目 頼朝と義経の仲を裂こうとした藤原朝方は教経に討たれ、忠信もまた教経を討つて八島の戦いで兄の敵を取ります。

小金吾討死の段

諸共立ち帰る。

夕陽西へ入る折から、主馬の小金吾武里は、上市村にて朝方が追手の人数に取り巻かれ、数ヶ所の疵を負ひながら、内侍若君御供申し、ひとまず都へ立ち帰るを、後に続いて数百人、逃さぬやらぬと追駆けたり。手傷は負えども気は鉄石の武里が、死に物狂いと思いの刃。ここに三人かしこに七人ばらりばらりとなぎ倒し、忠義の天成小金吾が、難なく相手を取って押さへ、ぐつと突つ込むとどめの刀。

「サア仕おおせし、嬉しや」

と、思ふ心のたるみにや『うん』とその身も倒れ伏す。

「ノウ悲しや」

と内侍、若君、いたはり抱へ抱き起こし、

「コレノウ金吾くいのふ、気をはつきりと持つてたも。そなたが死んで自らやこの子は何となるものぞ。情なや悲しや」

と泣き入り給ふ御声の、耳に通つて顔振り上げ、

「オ、内侍様、六代様、諦めて下さりませ。心は弥猛にはやれども、もう叶はぬ。コレ申し若君様、今際の際に金吾めが申すこと、ようお聞き遊ばせや。わが君維盛様はかねて御出家の御望み。熊野浦にて逢ひ奉りしと言ふ者ある故、高野山へと志し御二方をお供したれど、なかなかこの傷では一足も行かれず。お前様は御台様を伴ひ神谷の宿といふ所に内侍様を残し置き、人を頼んで山へ登り、父様のお名は言はれぬ、今道心の御出家と、尋ねてお逢い遊ばせや。西も東も敵の中。平家の御公達と悟られぬ様、お命め

でとう御成人の後、憚りながら金吾めが事思し召し出されなば、一滴の水一枝の花。それが即ち冥途へ御知行。御成長待つております。エ、お名残り惜しいお別れ」

と、言ふもせつなき息づかひ。六代君は取り継り、「死んでくれな小金吾。そちが死ぬると父様に逢ふ事がならぬわ」

と、泣き入り給へば内侍はせき上げ、「あれ聞いてたも、子心でもそなた一人を力にする。維盛様に逢ふまでは、死ぬまいぞ〜と、なぜ思ふてはたもらぬ。御一門残らず亡び、広い世界を敵に持ち、いつまで存へ居られふぞ。共に殺してたもの」
と嘆き給へば理りと、手負はいと涙にくれ、

「先君小松の重盛様は日本の聖人、若君様はその孫

君。諸神諸菩薩の恵みのない事はござりますまい。末頼みに思し召して、必ず短気をお出しなされな。アレ〜向うへ提灯の火影、又も追手の来るも知れず、若様伴ひこの場を早く〜」

「イヤ〜、深手のそなたを見捨て置いて、いづくを当てに行くものぞ。死なば共に」と座し給えば、

「エ、腑甲斐ない。六代様は大事にないか。この傷で死ぬる金吾めではござりませぬ。聞き入れなければすぐに切腹」

「ア、コレ待つてたも。それ程にまで思やるなら、成程先へ落ちませう。必ず死んでたもるなや」
「お気遣ひ遊ばすな。運に叶ひ後より参ろ」
「必ず待つてゐるぞや」

と、言ふ間に近づく提灯の、火影に恐れ是非なくも、

若君連れて落ち給ふ。御心根のいたわしき。手負は御後見送りく、

「死なぬと申せしは偽り。三千世界の運借つても、なんのこの傷で生きられませふ。内侍様、六代様、これがこの世のお別れでござります」

と、思ふ心も断末魔、知死期も六つの暮過ぎて、朝の露と消へにける。

程なく来たる提灯はこの村の五人組、何やらざわ／＼話し合ひ、山坂の別れ途に庄屋作が立ち留まり、
「コレ弥助の弥左衛門殿。貴様は鮎商売ゆえ、念押す上に押しかける。今言ひ付けた鎌倉の侍は聞き及んだ虫蛭。何やらこなたの耳をねぶつてはげる程言ひ付けたら、『畏ったく』と、滅多無性に請け合うたが、なんと覚えのあることかや」

「ハテ知れたこと。こなた衆も常からおれが性根を

知らぬか。血を分けた伴でも、見限ったら門端も踏まさぬ弥左衛門。膝ぶしが砕けても、畏ったら痺れも切らさぬ。したが後からの言ひ付けがもつけの幸ひ。嵯峨の奥から逃げて来た子を連れた女と大前髪この村へ入り込んだと追手からの知らせ。ところで虫殿がねぶりかけて、捕へたら褒美とある。コリヤまた格別よい仕事、皆も油断をせまいぞや」

「オ、ソレく、こんな時こなたの息子のいがみの権太郎さんを頼んで置かふ」

と五人組。山道行けば、弥左衛門。坂へ下りしも行く先の手負にばったり行き当たり、『ハッ』と飛び退き気味悪ながら、提灯振り上げそろ／＼立ち寄り、

「テモアアむごたらしう切ったわく。旅人そうなが、追剥の仕業ならば丸裸にしそふなもの。路銀を当てに悪者の仕業か」

と、悪い子を持つ親の身は、案じ過して、

「コレ〜手負殿〜」

と、呼べど答へもなき骸に、

「さてはもはや息絶えたか。いとしやいづくの人なるぞ。見ればふけた角前髪。袖振り合ふも他生の縁。

南無阿弥陀仏〜〜」

と回向して、『とかく浮き世は老少不定、哀れを見るも仏の異見。人は歪まず真直ぐに、後生の種が大事ぞ』と、思ひ続けて行き過ぎしが、何思いけん立ち止り、取つつ置いつの俄かの思案。そろり〜と立ち戻り、辺り見回し〜て、抜き身を拾い取るより早く、死首はっしと打ち落とし、提灯吹き消し首堤げ、

「忝〜」

と弥左衛門。直ぐなる道も横飛びにわが家をさして

(立ち帰る)。

すしやの段

春は来ねども花咲かす、娘が漬けた鮓ならば、な

れがよかると買ひにくる。風味も吉野、下市に売り

広めたる所の名物、釣瓶鮓屋の弥左衛門、留守のう

ちにも商売に、抜け目も内儀がはや漬に、娘お里が

片襷、裾に前垂ほやくと、愛に愛持つ鮓の酢、押さ

へてしめてなれさする、うまい盛りの振袖が、釣瓶

鮓とはものらし。

神ならず仏ならねばそれども知らぬ道をば行き

迷ふ、若葉の内侍ないしは若君を宿める方へ預け置き、『手

負のことも頼まん』と思ひ寄る身も縁の端、この家

を見かけ戸を打ち叩き、

「一夜の宿」

と乞ひ給へば、維盛はよい退きしほと表の方、叩く

とほそ
枢に声を寄せ、

「この内は鮓商売、宿屋ではござらぬ」

と、愛想のないが愛想となり。

「イヤこれ申し、稚きを連れた旅の女、是非に一夜」

と宣ふにぞ、

「断り言ふて帰さん」

と戸を押し開き月影に、見れば内侍と六代君、『ハッ』

と戸を鎖さし内の様子、娘の手前もいぶかしく、そろ

と立ち寄り見給へば、早くも結ぶ夢の体てい、表に内

侍は不思議の思ひ、

「今のはどふやらわが夫つまに、似たと思へど形容なりかたち、つ

むりも青しもおのこき下男、よもや」

と思ひ給ふ内、戸を押し開いて維盛卿、

「若葉の内侍か、六代か」

と、宣ふ声に、

「ヒヤア、さてはわが夫」

「父様か」

「ノウなつかしや」

と取り継り、詞はなくて三人は、泣くより他の事ぞなき。

「まづまづ内へ」

と密かに伴ひ、

「今宵は取り分け都の事、思ひ暮してゐたりしが、

親子共に息災で不思議の対面、さりながら某この家

にゐる事を、誰が知らせしぞ殊ことにまた、遙々の旅の

空、供連れぬも心得ず」

と、尋ね給へば若葉の君、

「都でお別れ申してより、須磨や八島の軍いくさを案じ、

一門残らず討死と聞く悲しさも嗟峨の奥、泣いてば

つかり暮らせしに、高野とやらんにおはするといふ

者のある故に、小金吾召し連れお行方を心ざす道追

手に出合ひ、可愛や金吾は深手の別れ、頼みも力も

ない中に、廻り逢ふたは嬉しいが、三位中將維盛様

がこのお姿は何事ぞ。袖のないこの羽織に、このお

つむりは」

と取り付いて、咽むせび絶へ入り給ふにぞ、面目なさに

維盛も、額に手を当て袖を当て、伏し沈みてぞおは

します。涙の内にも若葉の君、伏したる娘に目を付

け給ひ、

「若い女中の寝入端ねいりばな、殊に枕も二つあり、定めてお

伽の人ならん。かくゆるかしきお暮らしなら、都の

事も思し召し、風の便りもあるべきに、打ち捨て給

ふは胴慾」

と恨み給へば、

「ホ、オそれも心にかゝりしかど、文の落ち散る恐

れあり。わけてこの家の弥左衛門、父重盛の恩報じと、われを助けてこれまでに、重々厚き夫婦が情け。

何がな一礼返礼と思ふ折柄娘の恋路、つれなく言はゞ過ちあらん。かへつて恩が仇なりと、仮の契りは結べども、女は嫉妬に大事も洩すと、弥左衛門にも口留して、わが身の上は明さず、仇な枕も親共へ、義理にこれまで契りし」

と、語り給へば伏したる娘、堪へ兼ねしか声上げて、『わつ』とばかりに泣き出す。

「コハなに故」

と驚く内侍、若君引き連れ逃げ退かんとし給へば、

「ノウウこれお待ち下され」

と、涙と共にお里は駆け寄り、

「まづ〜これへ」

と内侍若君上座へ直し、

「私は里と申してこの家の娘。いたづら者憎い奴と、

思し召されん申し訳。過ぎつる春の頃、色珍しい草中へ、絵にある様な殿御のお出で、維盛様とは露知らず女の浅い心から、可愛らしいとらしいと思ひ染めたが恋のもと。父も聞こえず母様も、夢にも知らして下さつたら、たとへ焦がれて死ぬればとて、雲居に近き御方へ、鮎屋の娘が惚れられふか。一生連れ添ふ殿御ぢやと、思ひ込んであるものを、二世の固めは叶はぬ、親への義理に契つたとは、情ないお情に預かりました」

とどうど伏し、身を震はして泣きければ。維盛卿は気の毒の、内侍も道理の詫び涙、乾く間もなき折からに、村の役人駆け来たり戸を叩いて、

「ア、コレ〜、こゝへ梶原様が見へます。内掃除しておかれい」

と言ひ捨てゝ立ち帰る。人々『ハッ』と泣く目も晴
れ、

「いかゞはせん」

と俄かの仰天、お里は早速さそくに心付き、

「まづ〱親の隠居屋敷上市村へ」

と気をあせる、

「げにその事は弥左衛門、われにも教へ置きしかど、
最早開かぬ平家の運命、検使を引き受け潔ふ腹搔き

切らん」

と身拵へ、内侍は悲しく、

「コレ、この若のいたいけ盛りを思し召し、ひとま

づこゝを」

と無理矢理に引立て給へば維盛も、子に引かさるゝ

後ろ髪、是非なくその場を落ち給ふ、御運の程ぞ危

ふけれ。

※演者・時間等の都合により多少の異同がございます。

予めご了承下さい。